

NPO 法人古代瀬波の里・文化遺産ネットワーク
研究紀要

NIWA

瀬波



2016
第3号



目次

平成 27 年度活動記録

木之下城伝承館掘部邸	3
青塚古墳史跡公園	4
ニワ里ねっと自主事業	5
犬山街プロジェクト	6
西尾市詳細分布調査	7
養老町委託事業	8
その他委託・助成金事業	9
活動年表	10

研究論考

木之下城の地形と犬山街「はじまりの地」 赤塚次郎	12
-----------------------------	----

活動報告

栗栖プロジェクト活動報告 大塚友恵	17
----------------------	----

犬山焼研究における現状と課題 青木 修	18
------------------------	----

犬山焼の魅力ー犬山焼文様の分類と考察 井上あゆこ	22
-----------------------------	----

調査報告

大平山周辺の古墳踏査成果について 服部哲也	26
--------------------------	----



平成 27 年度

活動記録

文化遺産のみえるまちづくり

NPO 法人ニワ里ねっとは、平成22年の2月に設立。多くのニワ里会員の皆様に支えられて、今年度で7度目の春を迎えます。

「文化遺産のみえるまちづくり」をコンセプトに、文化遺産を活かした事業を展開。現在では、「瀬波」里エリアのみならず、西尾市や養老町など活動エリアをひろげていきます。

まちなかに眠る文化遺産の魅力をいかに発信するべきか。後世へと残していくには、今なにをすべきなのか。日々、文化遺産と向き合いながら活動をしています。

木之下城伝承館

堀部邸 (旧堀部家住宅)

犬山城下町にある明治時代の古建築、堀部邸。ニワ里ねつとの新たな拠点として、平成27年度より運営を開始。



* オープニングセレモニー



* 堀部邸おそうじ



* 木之下城伝承館・堀部邸



* 猪之子座『旭堂南海の上方講談をたっぷり』



* 修繕ワークショップ・柿渋塗り

旧堀部家住宅管理業務

本年度より、犬山城下町にある明治初期の建築物「堀部家住宅」を「木之下城伝承館・堀部邸」として運営開始しました。5月に開館記念式典を開催し、神楽の演舞や電子オルガンの音色とともに華やかにオープンしました。5月から12月までの開館で、平成27年度入館者数は約3500名の方に来館いただきました。

冬期休館期間には、邸宅内の修復ワークショップなどを開催。今後も堀部邸をよりよい空間へと蘇らせるべく活動をしていく予定です。

その他、コンサートや茶会、講座、展示会など様々なイベント会場としても活用していただきました。

猪之子座事業

堀部邸の空間を活かし、歴史や伝統文化に触れる事業を展開。11月には和楽器の演奏を楽しむコンサート、12月には講師の旭堂南海さんをお迎えして講談会を行いました。冬期休館明けの3月には、獅子舞の演舞にて、「和」の芸能を来館の皆さんに楽しんでいただきました。

青塚古墳史跡公園

活用・管理業務

地域とともに、史跡を守っていく。
美しい古墳を残すために、地域協働の
事業にも力を入れ活動しています。



* 小学校社会見学にて



* まほら講座



* 邇波史楽座『よみがえれ、青塚の大王』



* 青塚古墳を守る会



* あおつか子ども教室

青塚古墳史跡公園活用・管理業務

青塚古墳史跡公園の管理・運営は、平成27年度で6年目。青塚近隣住民の方にも気軽に立ち寄ってくださる地元に密着した施設となりつつあります。墳丘の草刈や園内の手入れなど日々の美化にも努めています。

本年度は来館者数12,613名、学校見学数30校でした。

青塚古墳活用事業

犬山の焼きものをテーマに、企画展『犬山やきものの旅』を開催。連動企画として、焼き物の歴史を学ぶ『まほら講座』も実施しました。

10月に開催した『邇波史楽座』では、野外劇の上演という新たな試みでしたが、夕刻から夜へと刻々と変化する青塚古墳の景色に多くの方から好評をいただきました。

また、夏休みの『あおつか子ども教室』では、縄文の布作りや、古墳見学会など子らしく歴史に親しめるイベントを企画しました。

『青塚古墳を守る会』も継続して実施、のべ84名の方にご参加いただき、墳丘の清掃活動を行いました。

ニワ里ねっと 自主事業

散策やバスツアーなど文化遺産を楽しむ事業を実施。今年度は発掘見学ウォーキングなどニワ里らしい企画も。



*バスツアーの風景



*ニワ里カレッジ

*ニワ里バスツアー『近江国神崎・蒲生郡古墳めぐりツアー』



*ニワ里ウォーキング
『石工のいた里, 善師野を歩く』



*発掘現場見学ツアー

ニワ里ウォーキング・バスツアー

5月には、ニワ里会員の方の案内のもと、犬山善師野エリアの知られざる文化遺産を見学しました。

2月・8月に行われたバスツアーでは阿智村・東近江市方面へ。現地講師の方による熱の入った解説で、どちらも充実したツアーとなりました。ニワ里カレッジは全6回開催。

春日井市・名古屋市の発掘現場を見学するウォーキングツアーも開催、現地ならではの魅力溢れる見学会となりました。

自主勉強会など

ニワ里ねっとの会員で構成するGEO部や、地域学芸員養成塾の塾生でつくる勉強会など自主的な部活、勉強会も発足しました。現地に出かけたり、参加者の発表があったりと積極的に活動を進めています。

栗栖プロジェクト

栗栖地区における文化遺産普及事業。講師に名古屋大学名誉教授の糸魚川淳二先生を迎え、栗栖の自然や地質についての講座を開催。

犬山街プロジェクト

文化遺産を活かした 地域活性化事業

4年目となる本事業。今年は犬山に残る「お祭り」・「伝承」にスポットをあて、その魅力を発信しました。



* 歴史座「やろか水」語り



* 地域学芸員養成塾



* 街道・祭礼ウォーク



* 地域学芸員養成塾・栗栖にて



* 歴史座of犬山街プロジェクト

いぬやま地域学芸員養成塾

第2期生いぬやま地域学芸員養成塾、今年度は8名の方にご参加いただきました。市内の文化遺産を学ぶ講座を全8回実施、最終回には皆さんが調査された犬山市内の文化遺産について、発表いただきました。

街道・祭礼ウォーキング

10月に行われる犬山市前原の「鬼祭り」、羽黒鳴海てがし神社の秋祭りを訪ねるウォーキングを開催しました。現地講師の解説を伺いながら見学していただき、祭りの空気を感じながらのツアーになりました。

歴史座 of 犬山街プロジェクト

『怪異やろか水 - 伝説が語るモノ』と題し、犬山の伝承を取り上げたシンポジウムを行いました。第1部は、名古屋経済大学の高木史人先生に「やろか水」の伝説についてご講演いただきました。第2部は、広瀬まりさんの語りと、ニワ里会員さんによるトークセッション。広瀬さんの語りで犬山の伝承を魅力的に伝えていただきました。



犬山たび案内人
久久キギス丸

西尾市

詳細分布調査

旧吉良町の詳細遺跡分布調査を実施。西尾市での調査は今年度で3年目を迎えました。



* 詳細分布調査風景



* 歴史座in吉良町『古代の幡豆郡磯泊（しはと）の里』



* 史跡散策「吉良・岡山の文化遺産を訪ねる」

西尾市詳細分布調査

「旧幡豆町」「旧一色町」と昨年度に引き続き西尾市域の「旧吉良町」の遺跡詳細分布調査を実施しました。GPSを活用した現地フィールド調査にて、多くの遺物の分布と文化遺産を確認することができました。

ウォーキング・歴史座

史跡散策ワークショップでは「吉良・岡山の文化遺産を訪ねる」を開催。西尾市教育委員会の三田敦司さんによる現地解説にて、吉良八幡山古墳や善光寺沢遺跡などを散策。傳承などを交えた楽しい史跡散策を行いました。参加者は39名。

分布調査の成果を市民の皆様にお伝えする歴史座in吉良町「古代の幡豆郡磯泊（しはと）の里」を、西尾市岩瀬文庫にて開催しました。講演は北村宏和さんによる「中世の海岸線を探る」、赤塚理事長による「正法寺山古墳に眠る王は誰だ」。セッションとして旧吉良町内の文化遺産の成果報告を行いました。参加者は75名。

養老町委託業務

平成 29 年の養老改元 1300 年祭に向け、養老町の文化遺産の魅力を伝える事業を展開。



* 展示「会いに来てね、養老の有名な「養老公園ver.」



* シンポジウム風景



* シンポジウム『古代天皇と養老町～養老改元の背景を探る～』

シンポジウムの開催、養老古道広域観光ウォーキングマップ「養老古道 map 絵巻」の作成、養老の宝物46選認定事業を行いました。11月に開催したシンポジウム『古代天皇と養老町～養老改元の背景を探る～』では、国士舘大学の仁藤智子

養老改元1300年祭関連事業



* 養老古道map絵巻

その他委託事業

また、昨年度に引き続き8月に火打石ワークショップ、2月にきのこ栽培ワークショップを開催し、多くの町民の皆さんにご参加いただきました。

また、昨年度に引き続き8月に火打石ワークショップ、2月にきのこ栽培ワークショップを開催し、多くの町民の皆さんにご参加いただきました。11月には、展示「会いに来てね、養老の有名な「養老公園ver.」」を開催。展示の支援事業を行いました。

先生による特別講演が行われました。講演後に行われたパネルディスカッションでは三重大学の山中章先生、国立歴史民俗博物館の仁藤敦史先生、ニワ里ねつとの赤塚次郎理事長をお迎えし、「養老改元」について熱く語っていただき、会場も大変盛り上がりました。

「養老古道map 絵巻」は、充実した内容と美しい挿絵で素晴らしい冊子が出来上がりました。養老町内にて配布中です。

養老の宝物46選認定事業では認定の基礎資料の整理など市民から選ばれた200点の「宝物」データをまとめました。

その他

委託・助成金事業

東之宮古墳普及啓発事業、尾張旭市考古展・民具展開催業務、犬山市市民活動助成金、文化遺産カード事業など。



* 東之宮マップ作成ワークショップ



* 青塚周遊ツアー



* 東之宮古墳講演会 現地フィールドワーク



* 考古企画展『城山にはじめて窯を築く』

文化遺産カード

今年度は犬山市で6種、西尾市4種、笠松町6種で新たな文化遺産カードが配布開始されました。全126種類となり、文化遺産カードファンも増えつつあります。HPもリニューアルオープンしました。今後もご期待。

その他委託・助成金事業

犬山市の東之宮古墳普及啓発事業として、東之宮古墳のマップ作成ワークショップと、講演会を行いました。

尾張旭市では、スカイワードあさひにて企画展の支援事業を実施しました。10月10日より民具企画展『昭和の尾張旭』、平成28年2月29日より、考古企画展『城山にはじめて「窯」を築く』を開催しました。尾張旭市の民俗資料・考古資料を、写真パネルや資料を用いて分かりやすく魅力的に展示しました。どちらの展示も継続して開催中です。

その他、犬山市市民活動助成金による『青塚古墳発文化遺産周遊マップ』の製作も行っています。



* 文化遺産カード

日時：イベント名

①『講演名・イベント名』 ②講師名 ③開催時間 ④開催場所 ⑤参加者数

敦史（国立歴史民俗博物館教授）、赤塚次郎（ニワ里ねっと）
④14:00-16:00 ⑤約500名

7・14・15日：養老町郷土の先人顕彰展 ①『会いに来てね。養老の有名な 養老公園 ver.』 ④養老町民会館・養老公園 ⑤のべ423名

22日：猪之子座 ①『音を楽しむ』 ②広瀬まりほか
③15:00- ④堀部邸 ⑤48名

10日：いぬやま地域学芸員養成塾 ①『犬山の自然』
②森 勇一（金城学院大学非常勤講師） ③10:00-12:00
④青塚古墳ガイダンス施設 ⑤8名

12日：東之宮古墳普及啓発事業 ①『東之宮古墳マップ作成ワークショップ』 ②赤塚次郎（ニワ里ねっと）
③10:00-12:00 ④犬山遊園駅周辺 ⑤9名

16日：猪之子座 ①『旭堂南海の上方講談をたっぷり！』
②旭堂南海 ③18:30- ④堀部邸 ⑤35名

19日：いぬやま地域学芸員養成塾 ①『登録文化財基礎資料演習』 ②長谷川良夫（犬山城下町を守る会）
③10:00-12:00 ④堀部邸 ⑤8名

21日：まほら講座 ①『古代・中世の犬山の焼き物について』 ②渡邊博人（各務原市立中央図書館）
③10:00-12:00 ④青塚古墳ガイダンス施設 ⑤13名

26日：東之宮古墳普及啓発事業 ①『東之宮古墳マップ作成ワークショップ』 ②赤塚次郎（ニワ里ねっと）
③10:00-12:00 ④犬山遊園駅周辺 ⑤8名

29日：東之宮古墳講演会 ①『冬至の王との出会い』
②赤塚次郎（ニワ里ねっと） ③9:30-13:00 ④丸山地区学習等供用施設 ⑤59名

12月

10日：いぬやま地域学芸員養成塾 ①『山姥物語伝承について』 ②西松賢一郎（大口町歴史民俗資料館）、広瀬まり ③10:00-12:00 ④青塚古墳ガイダンス施設 ⑤8名

17日：いぬやま地域学芸員養成塾 ①『実習報告会』
③10:00-12:00 ④犬山福祉会館 ⑤8名

19日：ニワ里カレッジ ①『古代と未来のかけ橋 船来山古墳群』 ②恩田知美（本巣市教育委員会）
③10:00-11:30 ④青塚古墳ガイダンス施設 ⑤18名

1月

16日：まほら講座 ①『犬山のやきものを愉しむ』 ②岩田紗絵（財団法人岩田洗心館） ③10:00-12:00 ④青塚古墳ガイダンス施設 ⑤25名

31日：歴史座 of 犬山街プロジェクト ①『怪異やろか水 - 伝説が語るモノ』 ②高木史人（名古屋経済大学教授）
③10:00-15:00 ④犬山国際観光センターフロイデ ⑤190名

2月

2月 写真展 ①『犬山たび、伝説の息づく場面へ』 ④犬山市役所

7日：文化遺産発見ウォーク ①『吉良・岡山の文化遺産を訪ねる』 ②三田敦司（西尾市教育委員会） ③9:30-
④吉良町周辺 ⑤39名

13日：ニワ里カレッジ ①『近江国神崎郡の古墳文化 雪野山古墳を中心に』 ②赤塚次郎（ニワ里ねっと）

③10:00-11:30 ④青塚古墳ガイダンス施設 ⑤24名

20日：まほら講座 ①『今井焼・犬山焼について - 作品の魅力 -』 ②岩田紗絵（財団法人岩田洗心館）

③10:00-12:00 ④青塚古墳ガイダンス施設 ⑤25名

27日：きのご栽培ワークショップ ①『キノコをつくらう！』 ②津田 格（岐阜県立森林文化アカデミー准教授）・河合純子（養老町教育委員会） ③9:00-12:00 ④ふれあいセンター養老 ⑤42名

29日～：尾張旭市展示支援事業 ①『城山にはじめて窯を築く』 ④スカイワードあさひ

3月

2・3・9・10日：堀部邸修繕ワークショップ

①『主屋・離れ座敷障子張り』・『黒壁塀の柿渋塗り』
⑤のべ20人

5日：ニワ里カレッジ ①『三陸復興支援ツーリング報告会 - やっぱり貝塚は被災していなかった！ -』 ②服部哲也（ニワ里ねっと） ③10:00-11:30 ④青塚古墳ガイダンス施設 ⑤24名

11日：ニワ里バスツアー ①『近江の国神崎郡・蒲生郡の古墳めぐりツアー』 ②赤塚次郎（ニワ里ねっと）、福田由里子（東近江市埋蔵文化財センター） ④東近江市周辺 ⑤29名

19日：歴史座 in 西尾吉良 ①『古代幡豆郡磯泊の里』
②北村和宏（足助高等学校教頭） ③13:30-16:00 ④岩瀬文庫 ⑤70名

20日：犬山助成金事業 ①『青塚古墳発文化遺産周遊ツアー』 ②大塚友恵（ニワ里ねっと） ③10:00-12:00
④青塚古墳周辺 ⑤20名

27日：猪之子座 ①『花ひらく獅子舞』 ②愛唯美（話芸家）・広瀬まり（歌い手） ③14:00- ④堀部邸 ⑤60名

*養老古道広域観光ウォーキングマップ作成事業（岐阜県養老町）養老町にて「養老古道 map 絵巻」を製作。

*西尾市遺跡詳細分布調査。旧吉良町域に所在する文化遺産・遺跡の学術的詳細分布調査の実施。

*旧堀部家住宅利活用事業（愛知県犬山市）・「木之下城伝承館・堀部邸」として運用開始。

*青塚古墳史跡公園活用・管理業務（愛知県犬山市）。

*犬山市民活動助成金 青塚古墳周遊マップ作成。

堀部邸活用事業

ニワ里ねっと自主事業

青塚古墳史跡公園活用管理

犬山街プロジェクト

西尾市詳細分布調査

養老町委託事業

その他助成金・委託事業

5月

- 8日：ニワ里ウォーキング ①『石工のいた里、善師野を歩く』 ②麻野純子（ニワ里ねっと会員）③10:00-12:00
④犬山市善師野周辺 ⑤16名
- 16日：第8回瀬波史楽座 ①『瀬波史楽座』
③10:00-13:00 ④青塚古墳史跡公園 ⑤710名
- 24日：ニワ里ねっと総会 ③10:00- ④堀部邸⑤42名
- 31日：堀部邸開館記念式典 ①開館記念式典 ②熱田神楽保存会・安井正規（電子オルガン） ③13:30-15:30
④堀部邸 ⑤105名

6月

- 13日：青塚古墳を守る会 ①『青塚古墳を守る会』
③7:30-9:00 ④青塚古墳史跡公園 ⑤43名
- 23日：ニワ里 GEO 部 ①『八曾湿地に行ってみる』 ②森勇一（金城学院大学非常勤講師）④八曾周辺 ⑤8名

7月

- 1日：地域学芸員勉強会 ①ミーティング ③
10:00-12:00④堀部邸 ⑤18名
- 12日：ニワ里カレッジ ①『東北大震災と文化遺産 1』
②服部哲也（ニワ里ねっと） ③10:00-11:30 ④青塚古墳ガイダンス施設 ⑤25名
- 16日：栗栖プロジェクト ①『サマーキャンプ歴史学習』
②瀬瀬茂（名古屋市教育委員会） ③14:30-15:30 ④栗栖野外活動センター ⑤18名
- 25日：あおつか子ども教室 ①『挑戦！縄文時代の布を編む』 ②名和奈美 ③10:00-12:00 ④青塚古墳ガイダンス施設 ⑤5名
- 28日：発掘現場見学ツアー ①『高御堂古墳と桜下五反田遺跡の見学』 ②浅田博造（春日井市教育委員会）
③9:00-12:00 ④春日井市神領周辺 ⑤11名
- 29日：ニワ里ウォーキング ①『モモ次郎と歩く 犬山南まち、堀部邸と木之下城』 ②赤塚次郎（ニワ里ねっと）
④堀部邸周辺 ⑤14名

8月

- 5日：あおつか子ども教室 ①『あおつか調査団、オリジナルこふんをつくろう』 ②大塚友恵（ニワ里ねっと）
③10:00-12:00 ④青塚古墳ガイダンス施設 ⑤8名
- 7日：あおつか子ども教室 ①『あおつか調査団、オリジナルこふんをつくろう』 ②大塚友恵（ニワ里ねっと）
③10:00-12:00 ④青塚古墳ガイダンス施設 ⑤7名
- 8日：火打石ワークショップ ①『養老石で火をおこそう』
②水野裕之（名古屋市教育委員会） ③9:00-12:00 ④ふれあいセンター養老 ⑤30名
- 22日：あおつか子ども教室 ①『挑戦！縄文時代の布を編む』 ②名和奈美 ③10:00-12:00 ④青塚古墳ガイダンス施設 ⑤6名
- 23日：ニワ里カレッジ ①『東北大震災と文化遺産 2』
②服部哲也（ニワ里ねっと） ③10:00-11:30 ④青塚古墳ガイダンス施設 ⑤18名
- 28日：ニワ里バスツアー ①『東山道最大の難所 神坂峠

- と園原の里』 ②市澤英利（飯田市立上郷考古博物館）
③7:30-18:30 ④阿智村園原周辺 ⑤22名

9月

- 2日：発掘現場見学ツアー ①『勝手塚古墳と志段味古墳群の見学』 ②服部哲也（ニワ里ねっと） ③9:00-11:30
④名古屋市志段味周辺 ⑤9名
- 12日：青塚古墳を守る会 ①『青塚古墳を守る会』
③7:30-9:00 ④青塚古墳史跡公園 ⑤41名
- 17日：いぬやま地域学芸員養成塾 ①『犬山文化遺産概要』
②大塚友恵（ニワ里ねっと） ③10:00-12:00 ④堀部邸 ⑤8名
- 18日：いぬやま地域学芸員養成塾 ①『分布調査実習』
②瀬瀬茂（名古屋市教育委員会） ③10:00-12:00 ④堀部邸 ⑤8名

10月

- 3日：ニワ里カレッジ ①『名勝名古屋城二之丸庭園および発掘調査成果について』 ②市澤泰峰（名古屋城総合事務所） ③10:00-11:30 ④青塚古墳ガイダンス施設 ⑤11名
- 4日：街道・祭礼ウォーキング ①『天道宮神明社祭礼鬼祭りを訪ねる』 ②小嶋毅（犬山歴史研究会）
③13:30- ④犬山市羽黒周辺 ⑤22名
- 11日：街道・祭礼ウォーキング ①『羽黒鳴海てがし神社秋祭りを訪ねる』 ②福富数美（梶原景時公顕彰会）
③11:00- ④犬山市羽黒周辺 ⑤7名
- 10日～：民具企画展 ①『昭和の尾張旭』 ④スカイワードあさひ
- 15日：栗栖プロジェクト ①『栗栖に眠る、太古の歴史を見つけよう！』 ②糸魚川淳二先生（名古屋大学名誉教授）
③13:50～15:30 ④栗栖小学校 ⑤25名
- 17日：瀬波史楽座 ①『よみがえれ、青塚の大王』
③17:00- ④青塚古墳史跡公園 ⑤280名
- 19日：発掘現場見学ツアー ①『名古屋城名勝二之丸庭園と三の丸遺跡見学ツアー』 ②市澤泰峰（名古屋城総合事務所） ③10:00-12:00 ④名古屋城周辺 ⑤16名
- 22日：いぬやま地域学芸員養成塾 ①『木之下城について』
②赤塚次郎（ニワ里ねっと） ③10:00-12:00 ④堀部邸 ⑤8名
- 23日：いぬやま地域学芸員養成塾 ①『入鹿池周辺の古墳』
②服部哲也（ニワ里ねっと） ③10:00-12:00 ④青塚古墳ガイダンス施設 ⑤8名
- 29日：東之宮古墳普及啓発事業①『東之宮古墳マップ作成ワークショップ』 ②赤塚次郎（ニワ里ねっと）
③10:00-12:00 ④堀部邸 ⑤9名
- 31日：まほら講座 ①『古代・中世の犬山の焼き物について』 ②渡邊博人（各務原市立中央図書館）
③10:00-12:00 ④青塚古墳ガイダンス施設 ⑤18名

11月

- 7日：養老改元 1300 年古代歴史シンポジウム ①『古代天皇と養老町～養老改元の背景を探る～』 ②仁藤智子（国士館大学准教授）、山中章（三重大学名誉教授）、仁藤

木之下城の地形と

犬山街「はじまりの地」

NPO法人 古代瀬波の里・文化遺産ネットワーク

赤塚次郎

はじめに

愛知県犬山市は木曾の山間から流れ落ちる木曾川が、広大な濃尾平野と出会う場面である。現在の名鉄犬山駅から西側には市街地がひろがり、近年では駅の東側も水田地帯から一変し、新しい街並が整備されてきた。多くの観光客が訪れる「犬山城とその城下町」は、主にこの犬山駅北西側の旧市街地を中心として保存されてきた街並である。今日の犬山を象徴する犬山城と城下町は、もちろん一夜にして出来上がったわけではない。特にその前身として「木之下城とその城下町」が存在した点は重要である。そして現在まで約600年のほどの歴史を刻んできた。そこでここでは、犬山街（ここでは仮に旧犬山町の市街地を「犬山街」と呼ぶことにしたい）の原点と

もうべき木之下城とその城下町のイメージを考えてみることにしたい。僅かに残る木之下城関係の文化遺産などを手がかりとして、その城下町界隈の風景を復原推定してみたい。ただ関連する文献資料等は極めて限られており、結果的に推論の域をでないのであるが、ここではあえて一つの可能性を探ってみよう。キーワードは「地形」「地割」「そして「伝承」。

ところで木之下城には興味深い物語が伝わっている。旧城内とされる愛宕神社境内には、現在も「金明水」と呼ばれる井戸が残る。この金明水は、どんな厳しい日照りでも水がかれたことのない井戸として知られ、白龍さまをお祀りする。また愛宕神社の西南100メートルほどの宅地の中には、ひっそりと「銀明水」と呼ばれる井戸も残されている。

木之下城の謎解きは、この二つの金と銀の「明水」から出発することになる。

はじまりの地「田中天神の森」

現在の「犬山城とその城下町」の景観を前提に考えると、犬山駅西に存在する木之下城の場所がいかにも不自然に思えてくる。それは自然の要害としての大きな段丘崖と木曾川が圧倒的な存在感となり受け止められているからであろう。何故、約10メートル以上の段差をもつ段丘崖を直接利用するのではなく、そこから南に下がった低地に木之下城が築城されたのか。疑問に思えてくるが、実はそこには犬山を形成する地形的な特徴が、大きく影響していると考えられる。その謎解きも、やはり一つの伝承からはじまる。

犬山駅から南東に30メートルほど行くと、駅前の「しろひがし住宅」の中に公園が存在する。「田中天神の森」である。ここには一つの伝承が残る。

「この地は古くから人の住み着いたところで、現在の富岡の地もこの人たちが開拓した土地であった。し

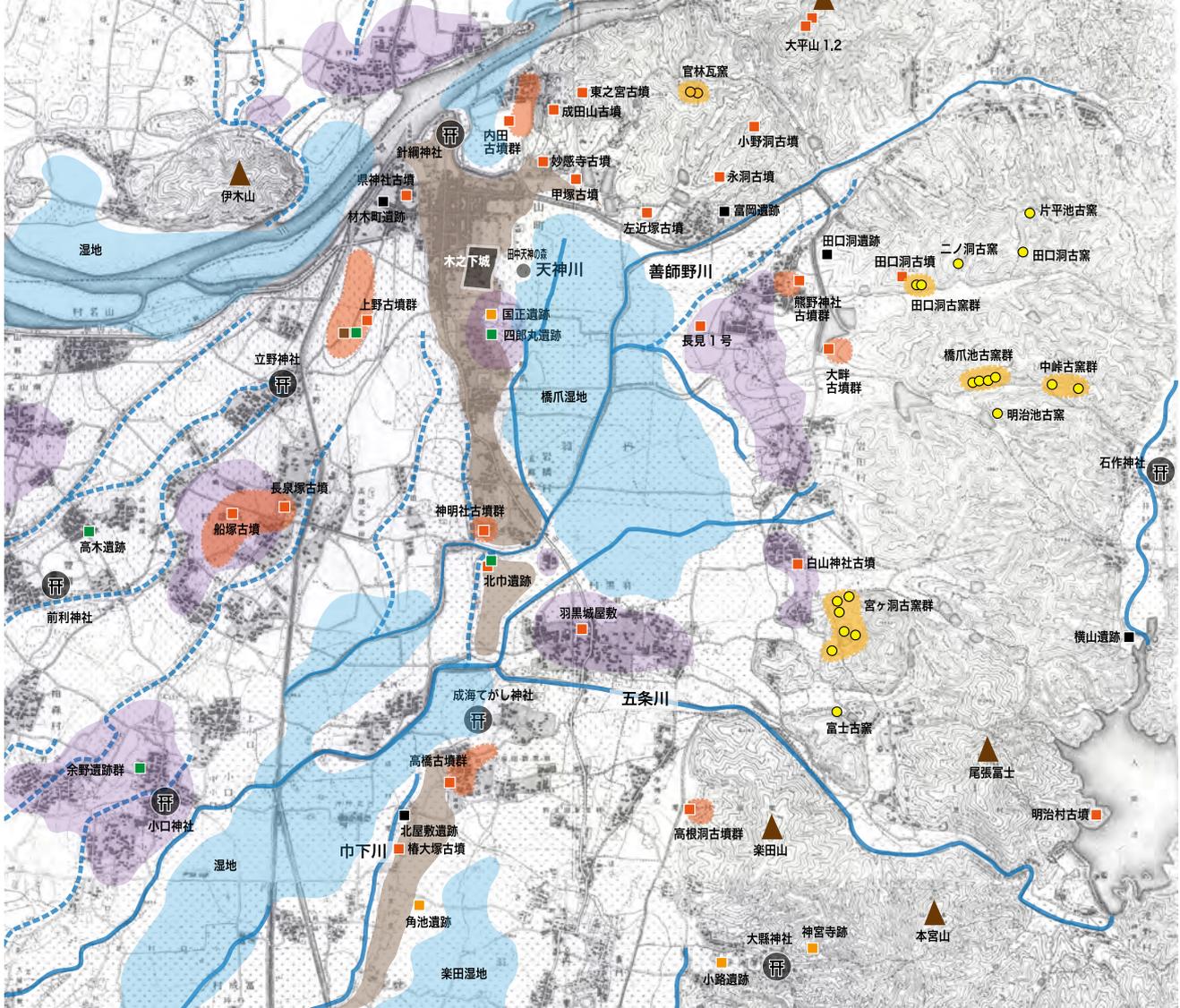
かし、ここは天神川と青木川の氾濫の被害が少なくなかったたので、住民の大部分は富岡に移住し、残った人々もことごとく余坂、木之下、外町へ移ってしまった。」(『犬山市の文化財』2008 犬山市教育委員会)

この物語で注目すべき点は二つある。まず第一に、かつてムラが存在したが、ここは洪水多発地域であった。第二に人々は北側の山麓と東側のやや高い場所に移転した。水、洪水伝承と木之下城に残る明水伝承。そこにはこの地がどういう場面であるのかを教えてください。

そしてこの地、すなわち「田中天神の森」こそが、犬山街・犬山城下町」発展への「はじまりの地」と位置づける事ができると考えている。

橋爪の湿地帯

「田中天神の森」の教えの第一の点は、明治年間の旧地形図を見るまでもなく、つい数十年前までは、駅東は水田地帯であり、市街化されることなくのどかな田園風景が広がっていた。またそこには字名として「梅坪（本来は埋坪と推定）」「蓮池」など池や湿地を想定させるような地



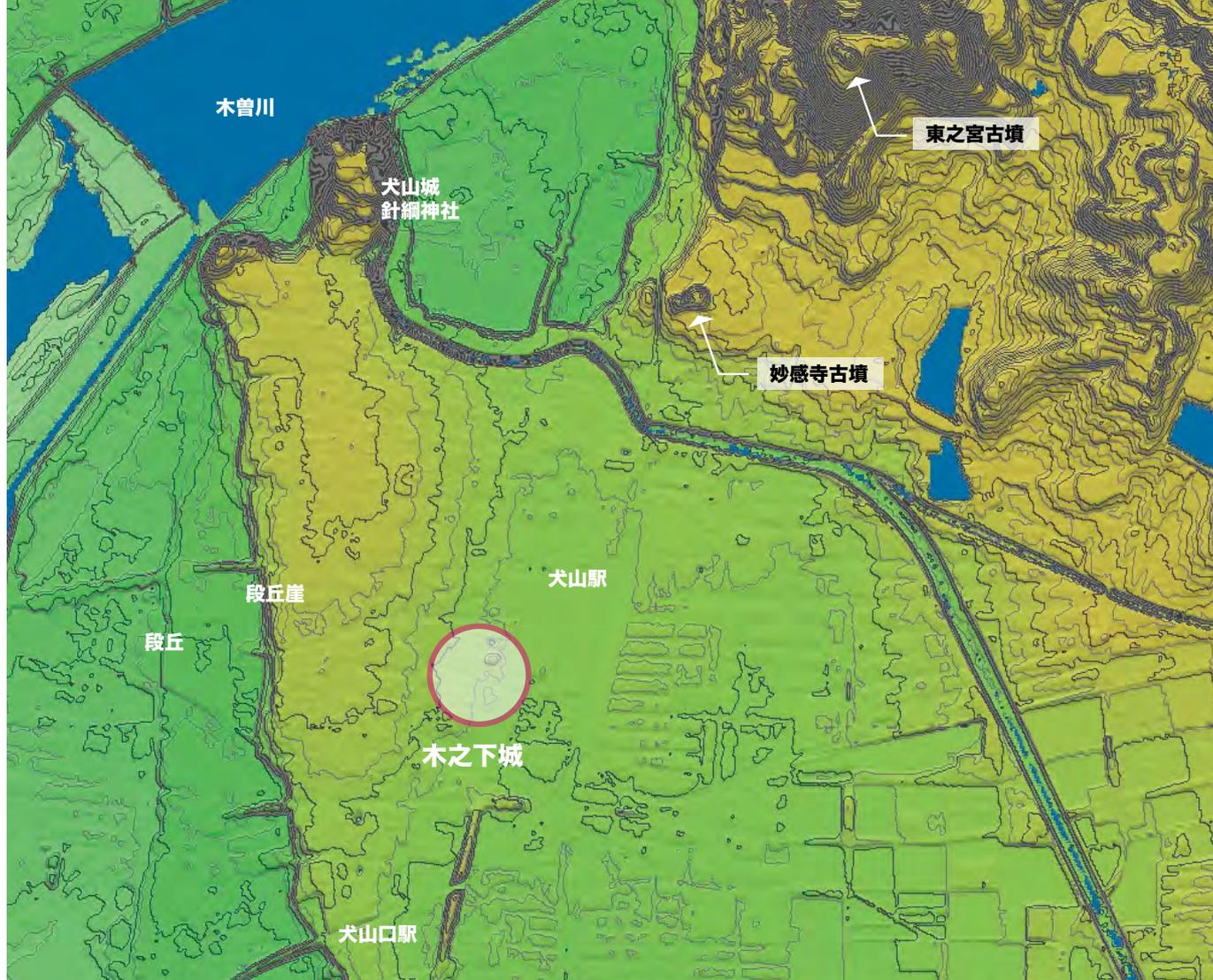
▶ 犬山遺跡分布図

名が残る。地形復原からは北側の白山平周辺からの水や、善師野・東部丘陵からの水が流れ込む場所であることは明らかである。さらに重要な点は北側に高く、西側は今の城下町が存在する5メートルほどの微高地（ここでは仮に「犬山微高地」と呼んでおく）によって水が遮られ、水の行き場が狭く、たまり場の地形になっている事である。まさに橋爪地区を中心として大きな池・湿地状の地形が復原できる。それを避けるため、近代になり人口の水路である「郷瀬川」が掘削され、直接、木曾川に水を落とすように整備された。田中天神の森が教える洪水多発地域は、まさにこうした地形的特徴をそのまま伝えているのである。ここは「水が浸かる場所ですから注意してください」という教えが聞こえてくる。

遺跡の分布と起点となる街・北宿

橋爪湿地周辺には目立った遺跡が見つかっていない。地割りなどから条里遺構を想定する意見もあるが、地形的な状況を考慮すると再検討が必要であろう。また条里遺構の推定も明確な考古学的な資料に基づくも

のでもない。田中天神の森から南側には、犬山微高地東端部に二つの遺跡が存在する。国正遺跡は奈良・平安時代を中心とした遺物が確認されており、四郎丸遺跡は弥生時代から古墳時代にかけての遺物が見られるが、分布域が狭い。いずれにしても定着的な集落景観を想定できるような資料は認めれない。ただ犬山微高地の東端、橋爪湿地側の緩斜面に集落の営みが弥生時代中期から細々と断続的に見られるようである。また「田中天神の森」の物語が何時の時代なのかは特定できないが、木之下城の築造以前、洪水が多発した時代を加味すると、おおむね室町時代、14世紀後半から15世紀前半期をまずは考えておいて良いかと思われる。したがって洪水の災害を避けながら地点を移動しつつ、細々とはある集落が営まれていった。小規模な集落が時期を経て場所を変えながら橋爪湿地の西南部緩斜面に存在したことが推測できそうである。その他「犬山微高地」内では、明確な遺跡の分布が知られていない点を踏まえると、現在の犬山市街地周辺で、集落変遷の歴史を想定できる地区は、



僅かにこの場面しかない。つまり第1にこうした犬山微高地西南部緩斜面での小規模・断続的な集落変遷の歴史を踏まえて、まず「田中天神の森」周辺に、遅くとも室町時代には集落が形成された。しかしこの場所は洪水多発地域であったため、洪水等を避けるため高台に移転、その西側にある現在の愛宕町・名栗町・猪子町、そしてかつて「北宿」と呼ばれた周辺に新たに集落ができた。やがてその延長でこの地に木之下城が築造されたと考えておきたい。

木之下城築城について

さて、木之下城について、まずは通説的な見解を整理しておきたい。15世紀後半に起こった応仁の乱により、美濃国の守護代であった斉藤妙椿が斯波義敏の領地である尾張地域を攻略するため、鵜沼に進軍する。これを察した義敏の臣であった織田広近が、その防御のため文明元年（1469）5月に城砦を現在の木之下地区に築いたのがはじまりとされている。織田広近は現在の大口町に所在する小口城を拠点とし、木之下城を支城として護りを固め

た。以後は代々織田氏が居城し、六代目とされる織田信康が天文6年（1537）に木之下城を廃城し、現在の犬山城付近に城を移した。織田信康は信長の父である織田信秀の弟にあたる。そもそも六代にわたって、織田氏が木之下城に居を構えていたかは異論が多く、明確な文献資料もほとんどない。ここでは文明年間木之下城が築城され、天文年間に現在の城山付近に城を移動させた可能性のみをまずは押さえておきたい。また木之下城廃城のあと、この場所に長泉寺（延命院）というお寺が存在し、その跡地に現在の愛宕神社が建てられた。

木之下城の大きさ

現在の犬山市立図書館の南側に接して愛宕神社が存在する。この愛宕神社が鎮座する周辺にかつて「木之下城」が存在したと推定されている。社殿がある高まりは高さ3メートルほどで、これが木之下城の主郭部分だと想定する事が多い。そして社殿の高まりとその北側に見られる凹み状の景観に、わずかにその面影を偲ぶ事ができるようでもある。そこで、

ここでは木之下を中心とした地割り
と、地形等から木之下城とその城下
町の推定復原案を描いてみることに
したい。

まず注目したいのが県道と犬山
市役所との間にある小さな路地
である。この道を南にたどっていく
と、薬師寺に出る。地形がこのあた
りから犬山微高地から湿地帯に移
行する場面と推定でき、これを東区画

とまずは考えておきたい。さらに愛
宕神社から西一本隔てた道は、ちよ
うど犬山城総構「木之下口」にあた
り、そこから南側は猪ノ子町・木之

下・専正寺町とつながる道が南北に
通る。これを西区画線と想定してお
こう。名栗町から木之下町にかけて

は、道の軸線が犬山城内の東西南北
地割りと大きく異なっており、おそ
らく犬山城築造以前から存在した、
古い地割りをそのまま残している
と思われる。これを手がかりとして木
之下城を復原すると、北は愛宕神社
から南を南小学校付近までとし、東
西は猪ノ子町から薬師町・専正寺町
に至る道と県道の東側に残る路地と
推定できる。愛宕神社を含めた城の
中心は、南北150メートル・東

西100メートルほどと推定され
ている事が多いが、ここではさらに
南北400メートル・東西250
メートルの大きな区画が存在した可
能性が高いと考えておきたい。なお
これらの軸線は、基本的には「犬山
微高地」そのものの地形的な特徴を
活かした地割りと考えてよい。

木之下城下町

木之下城を中心とする現在の犬山
市街地南部には、古い地割りがその
まま残存している。特に注目したい
道が二つある。一つは、名栗町の筋
である。明らかに犬山城下町とは全
く異なる軸線をもち、西南に傾斜す
る道はやがて段丘崖を降り犬山高校
に達する(名栗筋)。この軸線は、
慶長年間では本町筋が名栗町で行き
止まりとなり、それから西へ坂を
下つて、坂の中断を南進するのが旧
街道であったという(犬山里語記)。
すると城下町の南区画軸線であり、
木之下城北区画軸線であった可能性
が高い。そしてこの道筋に、かつて
北宿と呼ばれた(現在は御幸町界限)
街があり、「東部山村よりの道路と、
内田渡船よりの道路と此所に合し、

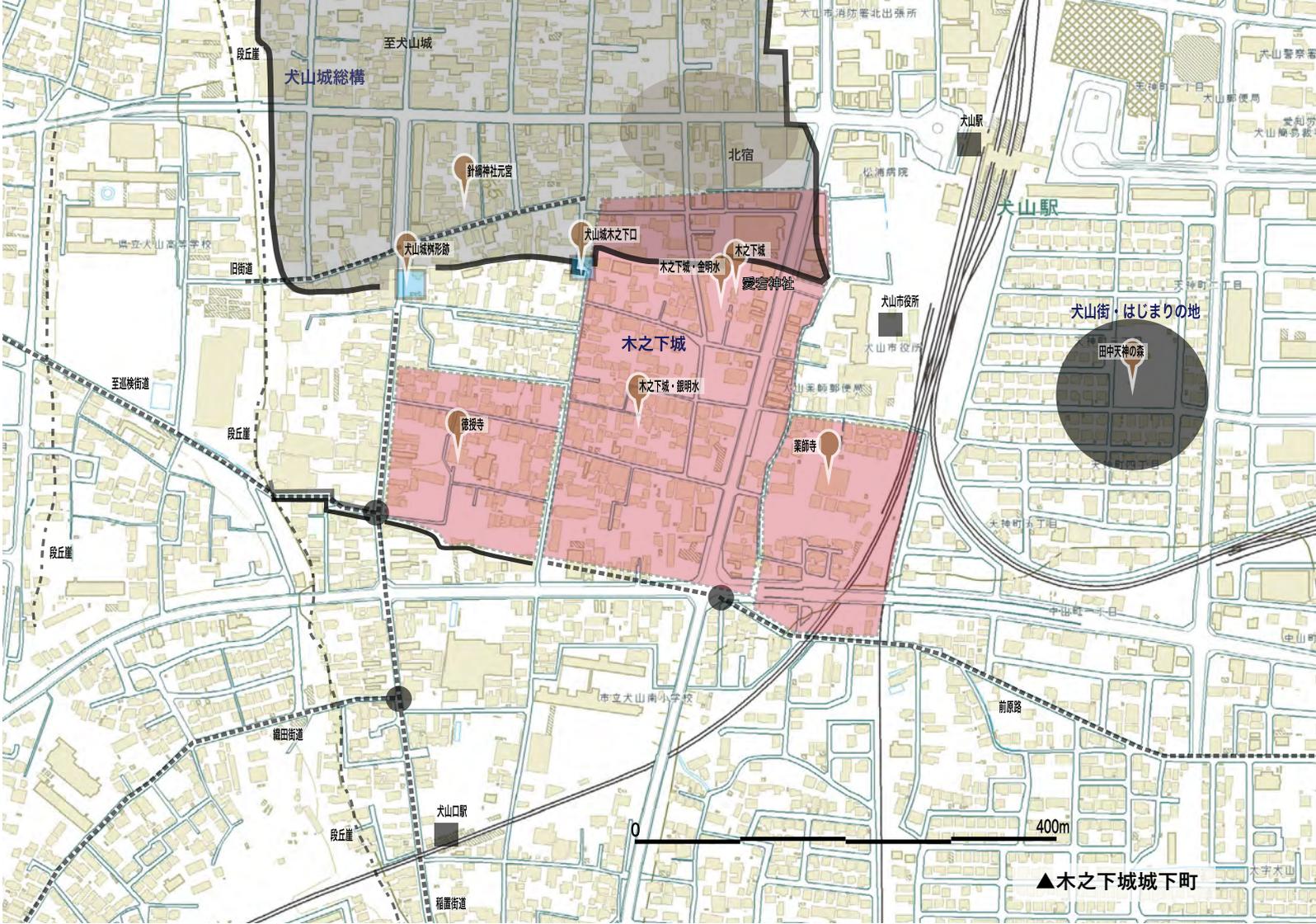
名栗町を経て大本町の段下へ降り羽
根橋を渡り、東川道路即ち古老の今
尚云う織田街道を南進して清須に達
する当時の幹線道路(『犬山城物語』
柴田貞一 昭和20年代)であった
ようである。北宿はまさに各街道が
交わる「チマタ」的な街として存在
し、当地区での中心的な街として賑
わっていたとも推定できる。木之下
城はその南側に存在した事になる。

今一つの道は、現在の犬山高校南
端から日本紙工業の坂を登り、外町
にでる東南に傾斜する軸線である
(坂下筋)。現在はこの延長上に徳授
寺の「赤門」が存在しているが、そ
のまま進むと(現在は道が消失)東
専正寺の信号にあたり、いわゆる「前
原道」とつながる。現在でもこの坂
下筋と本町通りが交わる地点から道
が急速に下降する状況が見られる。
また赤門の南側の駐車場も一段下つ
たような高低差が見て取れる。これ
は犬山微高地そのものの地形とする
よりも木之下城を築城した段階での
土地改変の名残と想定したい。すな
わちこの坂下筋から前原道につな
がる軸線が、一つの木之下城下町の南
区画を画する道であり、北側は名栗

筋を目安と考えたい。

木之下城のイメージと 犬山城下町開発への道筋

以上の諸点を踏まえてやや粗筋で
はあるが、木之下城とその城下町の
イメージを描いてみたい。まず「は
じまりの地」(田中天神の森)から
移り住んできた人たちを中心として
街(名栗筋・北宿)ができあがる。
旧織田街道や余坂道・前原道等が交
わる「チマタ」としての北宿街であ
る。街の東側には湿地帯が広がって
いた(現在の犬山駅周辺)。室町時
代の頃と推定したい。この段階では
現在の犬山城下町周辺である段丘崖
上はほぼ無人の原野、あるいは巨木
の森が広がっていたと思われる。そ
してその北端の岩山にはこの地の産
土である神が祀られていた。現在の
城山(犬山)針綱神社と想定したい
(その界限、段丘下には若干の集落
が存在していた)。そして文明年間
に北宿街の南側を開き、新たに木之
下城が築造され、織田街道が整備さ
れた。木之下城の南西に徳授寺、南
東に薬師寺が存在し、坂下筋から前
原道も同時に整備されていったもの
と推定したい。なお徳授寺と木之下



▲木之下城城下町

城・織田広近との関係は、横山住雄の見解(『徳授寺史』横山住雄)にそつて解釈し、木之下城築造期より、城の南西側の守りとしても想定されていたと考えるべき。木之下城はこのように北に北宿・名栗筋、西側は橋爪湿地帯が広がり、南側には徳授寺・薬師寺を備え、東側には段丘崖と原野の森がある要害と交通の要所として位置づけられたと考えられる。

木之下城に残る「金・銀明水」は北・東の丘陵部から流れ込む豊かな水を湛えた湿地帯が自然のダム湖のように、豊かな地下水脈を造り上げ、それに起因して決して枯れる事のない伝説が生み出された。そしてそれはその後犬山城下町へと発展する最も重要な要素であり、段丘上の新たな開墾地での水源としても活用された。つまり犬山城下町の水は、段丘上であるにも係らず豊かで恵まれた水を保有する、天然の地下ダム湖(橋爪湿地)を東側に持つことになる。それは木之下城下町形成過程で、井戸構築の経験とその歴史に基づくものでもあった。木曾川と東部丘陵から湧き出る「水とその水源」に恵ま

れ、その地形的特徴と景観を上手く利用し、「田中天神の森」から「木之下城とその城下町」、そしてやがて犬山城下町へと発展していったのである。我々はこれらの史跡、残された伝承などを、街づくりの基本として、歴史に学びながら文化遺産とその思想を、後世に大切に繋げて行く必要がある。

栗栖プロジェクト活動報告

NPO法人 古代瀬波の里・文化遺産ネットワーク
大塚 友恵

1 はじめに

NPO法人ニワ里ねつとでは、犬山市栗栖地区を対象に、平成23年度から継続して文化遺産の普及啓発事業「栗栖プロジェクト」を行ってきた。当プロジェクトでは、栗栖地区に残る縄文時代中期の「尾崎遺跡」や中世の「瀬ノ上遺跡」といった文化遺産の魅力を地域へと発信することで、文化遺産を後世へ残し、より豊かな地域社会を築く一助となることを目指している。前年度までの活動報告は研究紀要「瀬波」第2号に報告した。ここでは、平成27年度の活動を報告する。

2 活動報告

(1) 事業の目的

栗栖地区周辺の木曾川河岸には、広くチャートの地層が分布している。1980年代、こうしたチャートの地

層から放散虫の微化石を取り出す技術が確立され、分析が進んだ結果、古生代とされていた地層が中生代のものであると確認され、学会でも非常に注目された。また、栗栖地区では1951年に、中生代を代表する化石であるアンモナイトが発見されている。

これらの文化遺産は、学術的にだけでなく、栗栖という地域を考える上で重要であるにも関わらず、ほとんど知られていないのが現状である。そこで、今年度の栗栖プロジェクトでは、こうした栗栖地区の自然・地質に関わる文化遺産を題材に、栗栖小学校での歴史学習授業『栗栖に眠る、太古の歴史を見つけよう!』を行った。以下に授業当日の活動を報告する。

(2) 当日の様子

授業は平成27年10月16日(木)(午後13時50分〜15時30分)に開催した。特別講師として、名古屋大学名誉教授

の糸魚川淳二先生をお迎えし、学校での講義と現地フィールドワークを行った。栗栖小学校全校児童18名、先生方4名、地域住民の方3名にご参加いただいた。

まず、小学校学習室にて、糸魚川先生の講義を受けた。栗栖の地形や、アンモナイトの発見、栗栖周辺の地質についてなどを平易にお話いただいた。糸魚川先生に、本物のアンモナイトの化石をみせていただいた際には児童らから歓声が沸く場面もあった。

講義を終え、現地フィールドワークへ。小学校から木曾川河岸へ向かい、地形や地質を観察した。河原では、どのような石が栗栖にはあるのかを、実際に石を割って観察した。講義で話題になったチャートや、化石がみつけやすい石の種類も教えていただき、多くの子どもたちの興味を引いた。授業最後には先生よりアンモナイトとサメの歯の化石を御寄贈いただいた。

今回の授業は、案内チラシを栗栖地区内全戸に配布し、住民に授業への参加を呼びかけたが、実際に参加いただいた方は3名と少なかった。地域への呼びかけは今後の課題としたい。また、行った授業の内容は、栗栖小学校の文

◀現地フィールドワークの様子



化祭においてポスター発表している。

おわりに

今年度は、これまで対象としてきた歴史分野ではなく、自然分野の文化遺産を取り扱ったが、多様な視点から地域を考える重要性を改めて感じた。ニワ里ねつとの得意分野である「遺跡」をメインにしつつも、特定の分野に限定するのではなく、自然分野・民俗分野などあらゆる文化遺産を視野に入れつつ、今後も活動を継続していきたいと考えている。

謝辞 授業を開催するにあたり、糸魚川淳二先生には講師をご快諾いただいた。また実施にあたっては、服部哲也氏、久保禎子氏、瀧藤茂氏、名和奈美氏のご協力を賜った。記して感謝申し上げます。

犬山焼研究における現状と課題

(公財) 瀬戸市文化振興財団

青木 修



1 はじめに

犬山焼とは、江戸時代後期以降、尾張犬山市域で生産された陶磁器類の総称として理解されている。その基本となる窯業生産体制は、文化七年(1810)に成立し、現在も地方窯のひとつとして小規模ながら維持・継続している。その黎明期に相当する犬山焼の特徴は、大皿、大鉢をはじめとして、碗、瓶などの多彩な器種とそれらの器面を彩る赤絵や雲錦手と呼ばれる文様を採り入れた上絵付を得意とした特色ある存在感を示す点に求められ、瀬戸窯、美濃窯、常滑窯といった大規模窯業地を傍に構えるが、これらの生産品と比べて明らかに異なる作品を創作してきた。

本稿は、犬山焼研究グループ「犬山焼ミュージアム」(仮称)が実施

している資料調査の途中経過を踏まえ、主に江戸時代から明治時代はじめに関わる犬山焼研究の現状と課題をまとめた覚書として提示するものである。

犬山焼の窯炉を備える犬山市は、尾張北端部に位置し、南に愛知県小牧市、東に岐阜県可児市、北には木曾川をはさんで岐阜県各務原市と坂祝町がある。犬山市域を中世以前の窯業地の視点で概観すれば、小牧市周辺から展開する尾北窯の末端に、また岐阜県土岐市、多治見市、可児市に跨る東濃窯の西端付近にも相当する。つまり、犬山市の北部から東部域に広がる丘陵は、窯炉構築に適した地形と陶器生産を可能にした良質な陶土を包含する地層を備えており、市内で確認されている古代末期灰釉陶器焼成窯や中世東濃型山茶碗焼成窯などの調査からも裏付けられ

ている。ただ、13世紀後半から14世紀前半を最後に、犬山市域からは窯跡が姿を消すことになり、次に示す今井・宮ヶ洞窯跡の出現までには400年以上の期間を要することになる。

2 今井焼

今井・宮ヶ洞窯跡は、犬山市の南東部入鹿池の北側、行政区分では今井地区(旧今井村)にあり、石作神社から東側へ200mほど離れた標高155m付近の丘陵南向き斜面に構築されている。窯跡は、地元郷土奥村伝三郎が創業に関わったとされる記録も伝えられ、その存在は古くから知られていた。また、地元では犬山焼の創始段階と解釈され、真意は別として石作神社に奉納された狛犬は宮ヶ洞窯跡で生産されたと伝えられている。窯跡の発掘調



▲ 写真2 今井焼拳骨茶碗(個人蔵)



▲ 写真1 今井焼拳骨茶碗(個人蔵)

査が行われていないため詳細は不明としながらも、採集遺物の分析から江戸時代の連房式登窯により生産され、18世紀後半代を中心とした操業時期を基本とし、製品の多くは近世美濃窯の影響を強く受けていることが明らかになってきた。今井・宮ヶ洞窯跡の製品は、近世美濃窯の基本器種に共通しており、今のとこ

「犬山」銘「写真2」の押印が施されている点に最大の特徴があり、本窯跡に帰属することを明確に示す物的証拠となつている。言い換えれば、押印を確認できなければ、近世美濃窯の資料と誤認する可能性も今のところ否定できないのが現状である。一方で、今井・宮ヶ洞窯跡を近世美濃窯の範疇とする立場をとるなら、「犬山」銘の押印の存在をどのように説明するのが問われる。また、押印が示す「犬」の文字は、右上の点が中段に配される変形文字を採用しており、その解釈に伴う検証作業の継続を必要としている。従つて、今井・宮ヶ洞窯跡の製品は、近世美濃窯の範疇であると断言できないが、近世美濃窯の強い影響下で生産された「今井焼」として捉えることに異論はない。なお、「今井焼」と「犬山焼」は、同



写真3 犬山焼赤絵大皿 天保八年箱書（個人蔵）

じ犬山の地で生産された「やきもの」であることは相違ないが、「今井焼」と赤絵や雲錦手の特徴とする「犬山焼」との違いは一目瞭然であり、それぞれ異なる系統により成立した生産内容を備えている。

3 犬山焼

犬山焼は、文献資料の所見を優先すれば、犬山城下上本町の商人・島屋宗九郎が、七代犬山城主成瀬正寿に願ひ出て創業を開始し、文化十四年（1817）には、

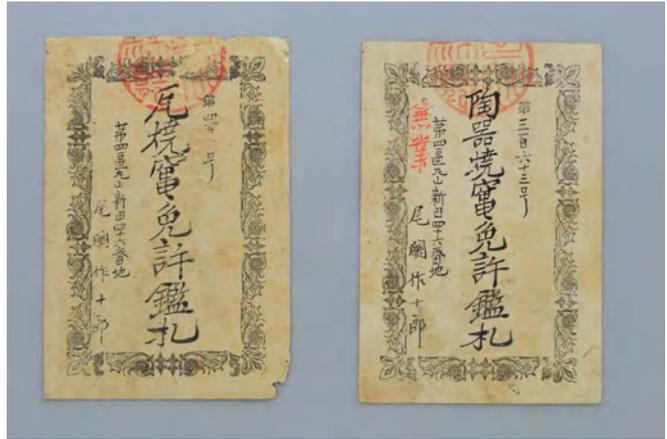
上本町の商人・綿屋太兵衛に窯株が譲渡され、京都三条粟田口からは陶工（ロク口師職人）の藤兵衛と久兵衛の二人を招聘したとされる。その後、旧志段見村（名古屋守山区）出身の加藤清蔵や加藤虎蔵なども参加したが、天保初年（1830）頃、太兵衛が撤退したため、加藤清蔵は城主成瀬正寿からの資金援助を受け、事実上の窯主となり、松原惣兵



写真4 犬山焼赤絵御神瓶子（針綱神社蔵）

衛の協力のもと操業が継続された。また、天保六年（1836）には、後に赤絵師として活躍する道平、天保七年（1837）には細工師である兼松所介も参加している。創業から四半世紀の間の状況は、このような経緯でたどるが、窯株は商人である島屋宗九郎から綿屋太兵衛、そして陶工の加藤清蔵へと渡り、見方を変えれば経営状態が不安定であったと理解することもできる。また、島

◀ 写真5 免許鑑札（個人蔵）



◀ 写真6 免許鑑札（裏面）



屋宗九郎と綿屋太兵衛の時代の生産内容は、犬山焼の特徴でもある赤絵製品を含め、全く解明できていないのが現状である。ところで、犬山焼の窯炉とされる丸山窯跡は、国宝犬山城から東へ1・2kmほど離れた標高90m前後の丘陵南向き斜面に立地している。窯跡は、昭和55年に発掘調査が実施され、『犬山市史 史料編三』（1983）に調査の概要が報告されている。しかし、窯跡の全体図や遺構図面が掲載されていな

い点、調査の記録類や出土資料が所在不明となっている点などが明らかになり検証作業を行う上で最大の障害となつている。従つて、犬山焼の研究は、文献と伝世資料を中心として取り組むことになるが、犬山焼の紀年銘資料は少なく、帰属時期の根拠はあまり得られていないのが現状である。一方で、伝世品の箱書に注目すれば、天保八年（1837）銘の赤絵大皿（個人蔵）〔写真3〕が最も古い事例として確認でき、赤絵

師・道平が犬山焼に参加する以前、つまり天保六年を遡る作品は今のところ不明のままである。その他、天保十二年（1841）の資料は、針綱神社の赤絵御神酒瓶子（一对）〔写真4〕、愛知県陶磁美術館が所蔵する赤絵玉取獅子大皿と赤絵馬上杯、未確認であるが満蔵院の赤絵御神酒瓶子（一对）と狛犬もこれに相当する。また、弘化三年（1846）の赤絵小皿（個人蔵）、慶応四年（1868）の愛知県陶磁美術館が所蔵する雲錦手徳利などの資料も認められる。ただ、安政年間（1854～1859）に相当するものが皆無であり、安政元年（1854）に発生した大地震による犬山周辺への影響も無関係ではないと考えられる。この中で、胴部に銘がある針綱神社の赤絵御神酒瓶子一对を詳しく紹介する。願主は「市橋平右衛門」で、犬山城下練屋町の越後屋当主に相当する可能性を検討している。陶師（口ク口師）は「清蔵」（加藤清蔵）と「惣兵衛」（松原惣兵衛）、赤面師（赤絵師）は「道平」の名が書かれている。口ク口師には二人の名前が併記されているが、清蔵は窯主としての位置付

けと考えられ、惣兵衛が口ク口で瓶子を成形し、道平が上絵を施したと推測できる注目すべき作品である。さて、犬山焼における幕末の動向も不安定な状況であったと考えられ、慶応三年（1867）には、瓦師の尾関作十郎が加藤清蔵から窯株を譲り受けることになり、初代尾関作十郎として陶器生産を開始した。明治二年（1869）には、瀬戸窯の加藤善治を主任として招聘し、犬山焼の立て直しを図ったと考えられる。ただ、窯株を手放した後、加藤清蔵と松原惣兵衛はどのように操業に携わっていたか明らかになつていない。そして、明治四年（1871）の廢藩置県、明治五年（1872）には窯株制度が廢止され、犬山焼の生産は途絶えたとする考えが主流となつてきた。しかし、新政府の体制が整いつつあった明治九年（1877）、愛知県庁から二代尾関作十郎に発給した「陶器焼窯免許鑑札」及び「瓦焼窯免許鑑札」〔写真5・6〕の存在が明らかになり、陶器と瓦生産の兼業体制で再建し、明治十年（1888）、東京上野公園で開催された第1回内国勸業博覧

会には、早くも犬山陶器が出品されている「写真7」。つまり、窯株の廃止により近世的な封建制度が廃止され、資本主義のもと自由な経営が可能となり、むしろ犬山焼生産は途絶えることなく新体制へ向けての操業が行われていたと考えるべきである。

4 犬山焼研究の現状と課題

近世の犬山焼は、明時代の中国陶磁や江戸時代後半の京焼などに見ら



写真7 博覧会賞状（個人蔵）

れる文様の模倣から赤絵や雲錦手などの上絵付を施すことにより器の中に雅な世界を演出し、地方窯としての空間の中で時代ごとの影響を受けつつ需要に応じた高級食器生産を行ってきた点に大きな特徴がある。これを犬山焼の伝統という言葉に置き換えるなら、赤絵や雲錦手などの卓越した上絵付にみる先人たちの技術を最優先として注目すべきであり、今日もなお絶えることなく継承されてきたかを改めて問う必要があると考えている。幕末から明治時代のはじめにかけて激動と言われる社会情勢の中において、犬山焼の操業にも大きな衝撃を与える結果となったことは先に示したとおりであるが、廃窯の危機を乗り越えた要因のひとつは、初代尾関作十郎と特に二代目尾関作十郎の存在が大きく、豊富な資金は基より、経営者としての高い資質を備え、安定した需要の見込まれる瓦生産を兼業した結果であると考えている。尾関家を取り組む近代の犬山焼は、伝統的な意匠を受け継ぎながらも、資本主義のもと自由な生産体制を可能とし、個性的な発想で創作が行われ、需要する階層も近

世と比べて大きく変化したことが想像される。ただ、犬山焼の流通に関しては具体的な事例から考察した研究は皆無に等しく、近世から近代はじめに限れば、発掘に伴う考古学的資料から抽出することもほとんどできていない。仮に、流通に関して犬山城主成瀬の指示を受け、尾張藩を介した体制であったと考えても、成瀬家文書から相応の記述は今のところ発見されておらず、また成瀬家に伝わる犬山焼もほとんど公表されていないのが現状である。つまり、近世窯業地の中で、犬山焼研究については、大きく遅れていると言えよう。以前から指摘してきたとおり、犬山焼を文化遺産として捉えるならば、犬山焼に関する研究の進展は急務であり、史実を正確に理解した上で作品を検証し具体的な評価を行うことが必要ではないかと考えている。

最後に、本稿に掲載した資料の所蔵者である針綱神社、尾関作十郎氏、橋本道廣氏には心より感謝する次第である。なお、本稿に掲載した写真は、すべて中野耕司（NPO法人古代瀬波の里・文化遺産ネットワーク 会員）が撮影し、内容の検証には井上あゆこ（犬山市文化史料館）、佐久間真子（愛知県陶磁美術館）の協力を得た。

【参考文献】

- 『犬山市史 史料編一 自然』 1982
- 犬山市教育委員会 犬山市史編さん委員会
- 『犬山市史 史料編三 考古 古代・中世』
- 1983 犬山市教育委員会 犬山市史編さん委員会
- 『犬山市史 別巻 文化財 民俗』
- 1985 犬山市教育委員会 犬山市史編さん委員会
- 『犬山市史 史料編六 近代・現代』
- 1989 犬山市教育委員会 犬山市史編さん委員会
- 『犬山市史 通史編上 原始・古代、中世、近世』 1997 犬山市教育委員会 犬山市史編さん委員会
- 企画展図録『犬山焼 浅井コレクション』
- 1999 愛知県陶磁資料館
- 青木 修 岩田紗絵 大塚友恵 奥野絵美 中野耕司 特別展図録『今井焼一埋もれた創業の記憶』 2014 財団法人岩田洗心館
- 青木 修 大塚友恵 中野耕司 「今井焼一成立とその生産内容」『研究紀要瀬波 創刊号』 2014 NPO法人古代瀬波の里・文化遺産ネットワーク
- 青木 修 井上あゆこ 中野耕司 佐久間真子 「犬山焼の魅力」『平成27年度考古学セミナー あいちの考古学2015 資料集』
- 2015 愛知県埋蔵文化財センター

犬山焼の魅力

犬山焼文様の分類と考察

犬山市文化史料館
井上 あゆこ

【一 はじめに】

犬山焼は、文献により文化七年（一八一〇）に創業したと考えられている。代表的な作品には「赤絵」と「雲錦手」がある。赤絵は紀年銘などから、天保年間（一八三〇年代）には生産されていたと考えられている。一方、雲錦手の帰属年代を示す資料は幕末のものが確認されている。本稿では、犬山焼における赤絵と雲錦手の文様について分類し、絵付技法や図案の変遷を通じて紹介する。また、犬山焼の成立に関する資料としても提示することを目的とする。

【二 犬山焼の歴史】

犬山の今井で宝暦年間（一七五一〜一七六四）に、奥村伝三郎が創業した窯で製作した陶器を今井焼と称した。今井焼には「犬山」の押印が

あることから、当初は犬山焼の始まりとされていた。灰釉・飴釉・瑠璃釉・鉄釉などを施した陶器で、犬山市指定有形文化財の「今井焼 水甕」には菊流水文が施されている。窯が廃窯後、約三十年を経て、文化七年（一八一〇）に犬山城下、上本町の

商人である島屋宗九郎が、余坂村丸山新田（現在の犬山市丸山）で開窯した。文化一四年（一八一七）に宗九郎に代わり窯主となった上本町の商人・綿屋太兵衛は、京都粟田口から陶工の藤兵衛と久兵衛を招いた。創業から約三〇年間の犬山焼絵付けに関する明確な資料はなく、その作風は不明である。

【三 赤絵】

犬山焼の魅力は写しから生まれた独自の文様にある。呉州赤絵が中国から九州に伝わり、模倣を重ね続け

て流通していった。その影響を受けた結果、図案は『図1』のように簡素化している。文様には獅子・龍・鳳凰・花・鳥を中心とし、他にも吉祥文様などが『図2』のように描かれている。『図2』⑧は蜂のようにも見えるが、『図3』にある一七世紀後半の有田焼の文様に多く見られる蟋蟀に分類した。簡素化により、蟋蟀の特徴的な後足が省略されたと思われる。中国では蟋蟀を闘わせて楽しむ伝統的昆虫相撲の闘蟋（どうしつ）があり、日本では鳴き声が好まれ枕草子や童謡にも登場する人気

▼ 図1
【獅子】



【牡丹】

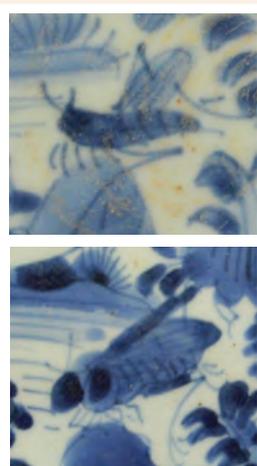


▶ 図2

- ①麒麟
- ②獅子
- ③海老
- ④鯉
- ⑤孔雀
- ⑥蓮
- ⑦芙蓉
- ⑧蟋蟀
- ⑨龍
- ⑩鳳凰
- ⑪兎
- ⑫双魚
- ⑬鴛鴦
- ⑭蘭



▼ 図3



▼ 図4



の昆虫である。

犬山焼の赤絵に見られる基本的な絵具は赤・緑・黒である。色調を分類すると、黒・赤（臙脂・朱）・緑（深緑・緑青・白青・黄緑）・青（群青・白群・青・水色）・黄・紫である。

犬山焼の陶画研究者に近藤清九郎（二八三〇～一八八九）がいる。清九郎は犬山藩士で、写本や絵図面の作成任務にも当たり、多くの資料や画帖が遺る。画においては日本画家の寺島華溪に師事し、狩野派に学んだ。犬山焼窯主・尾関作十郎の元に、明治四年（一八七二）の廃藩置県後は「秀胤」と改名し本格的な陶画研究を行った。日本各地の陶磁器の絵付けから、建築装飾、裂文の文様を模写している。秀胤の草稿

は犬山市文化史料館に保管されている。秀胤に関する資料は犬山市史の編纂のために近藤家から寄贈された資料の一部に含まれていた。また、愛知県史編纂に伴う調査で、尾関家から同様の図案冊子「犬山焼陶器画帖」が発見された。秀胤の草稿や画帖は、犬山焼に描かれる簡略化された図案の原形を判断する貴重な資料となる。犬山焼赤絵には、平皿類の体部外面に特徴的な文様が多く見られる。筆記体のような文様で、『図4』①にある秀胤画帖の龍文様構図と類似している。龍文様は簡略化して写し続けた結果、『図4』③のように原案を留めない表現となった。また、『図5』のように体部外面は簡略化した文様で表現されているのに対し、内面は緻密な表現となって

▼ 図5

外面

内面



いる。全体に複雑な文様や量産品の小皿など、見込みと周辺の装飾文様の筆跡に明らかな違いがある作品も少なくない。おそらく、大量生産に対応するため、絵付けも分業して行われていたと考えられる。

【四】 文様のモデル 【

犬山焼にはいくつか謎の文様が登場する。そういった文様の原形モデルを探るもの楽しみの一つである。

『図6』①に示した、珊瑚のよう

な枝分かれした文様がある。秀胤が京都で模写した草稿の一つに『図6』②のような類似した図案があり、このモデルとなるのは『図6』③の海松(みる)という海藻の一種である。海松は古くから神社や神棚に備える神饌や、平安貴族の衣装文様にも見られ、陶磁器の図案としても用いられたと考えられる。

『図6』④⑤のように、赤丸に黄緑の節足状の突起が四〜六本付き、周辺は深緑で花卉状の装飾が施される文様がある。他の犬山焼にも度々登場する文様である。中国呉州赤絵では吉祥文様の一つに「蓑亀」がある。蓑亀とは『図6』⑥のように甲羅に藻が生えた亀で、長寿の象徴として多く描かれることから『図6』④⑤文様は蓑亀の可能性もある。ただ、突起の本数など、詳細については今後の調査でも考察していききたい。

【五】 染付 【

また、犬山焼には呉州を用いたものがある。中国の呉州赤絵や染付は、一七世紀初めに九州へ伝わり、有田で模写された。文様の中には『図7』

▼ 図7



▼ 図6



③三重大学藻類学研究室

①②のような図案で水辺の鳥を描いたものも多く、磁器の素地と染付彩料の青を用いて白さを表現している。犬山焼の染付の多くは、淡い色調で大胆な筆遣いの絵付けが施される。ここでも図案の簡略化が認められ、『図7』②では鳥類であることすら判別が難しくなっているが、磁器文様にも多く使われる白鷺と思われる。『図7』③の秀胤筆陶器図案にも白鷺の草稿が見られる。

【六 雲錦手】

雲錦手は「吉野山の桜は霞かどぞ見え、竜田川の紅葉は錦のごとし」の意から、霞を桜に、錦を紅葉として描いた図案である。雲錦手の絵具には赤・緑・白・錆色などが用いられている。鉄を用いた釉下彩は茶系の錆色に発色し、樹木の表現に使われる。また、口縁部に無造作な筆致で錆色を施す口錆がある。『図8』①のように、桜花と紅葉の多くは白・緑・赤の順で呈色されており、特に雲錦手の緑系は、深緑が多い赤絵に比べて、緑青や白緑の穏やかな色調である。

桜と紅葉の樹木は高台周辺から内

側面に向かつて伸び、見込みを隔てて対を成す構図が基本となっている。桜花は、白・緑・赤で『図8』②のように三点で描かれており、これらを一単位として枝に散りばめている。三点の表現により全体の配置が安定している。葉脈は呈色の後、針金状の工具を使用した掻き落とし技法で『図8』③のように表現されている。

【七 雲錦手の分類】

犬山焼の雲錦手は主に紅葉の形状から『図9』のように四種類に分類した。『a類』最も多く見られる紅葉の形である。

『b類』非常に深い切れ込みが見られる紅葉で、丸みのある葉先から一筋の尖りが出ている。『c類』楓の雲錦手である。五つに分かれた葉がa類より膨らんでおり、切り込みが浅い。『d類』非常に丸みを帯びた梅のような楓である。

【八 おわりに】

犬山焼雲錦手の紅葉は、葉先が五つに分かれ、赤系と緑系の二色を一本の樹木に描くことが多い。特に緑系の紅葉は、深緑・白・黄を調合して緑青・白緑・黄緑など華やかな色に変化させるものもある。紅葉の形状の分類は、陶工・絵付師・製作年代を判断する基準となり得る部分もある。引き続き検証作業を続けていきたい。

▼ 図9



《a類》



《b類》



《c類》

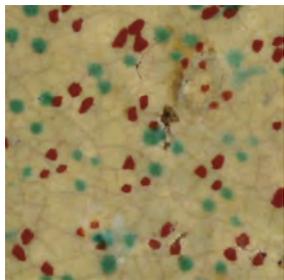


《d類》

▼ 図8



①



②



③

大平山周辺の 古墳踏査成果について

NPO法人 古代瀬波の里・文化遺産ネットワーク
服部 哲也

1. はじめに

NPO法人ニワ里ねつとでは平成24年度より「犬山街プロジェクト」の愛称にて犬山市文化遺産活用活性化事業を実施し、その成果の一部は全7冊の「犬山たび」としてわかりやすい形で公開した。また、この悉皆調査では新規の遺跡を発見することにもなり、入鹿池周辺の古墳については研究紀要「瀬波」にて報告した(註1)。今回は犬山市北部の栗栖地区(城東地区)にまたがる大平山(273m)中腹・山麓の古墳について紹介する。

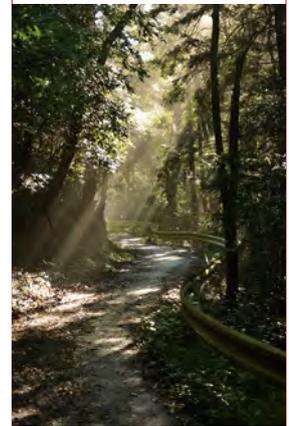
現在、大平山南斜面にて「埋蔵文化財周知の包蔵地」として愛知県 of 遺跡地図(註2、文献1。以後、「県遺跡地図」と略記する)に登録されている古墳は、大平山1号墳、大平山2号墳、善師野1号墳、善師野2

号墳、小野洞1号墳、永洞古墳、右近塚(左近塚である(図1))。しかし、1972年に愛知県立犬山高等学校歴史クラブから刊行された『地歴学報第9号』(文献2。以後、「学報9」と略記する)、同じく1972年に犬山市教育委員会から刊行された発掘調査報告書『十三塚古墳 熊野神社第1号墳』(文献3。以後、「古墳報告書」と略記する)にはこのほかにもいくつかの古墳が紹介されており、加えて今回の悉皆調査でも古墳の可能性ある新規の地点をいくつか確認した。ここではこれらを①「県遺跡地図」に登録されている古墳、

②「県遺跡地図」未掲載ながら他の文献で可能性が指摘されている古墳、③今回新規に可能性を指摘する古墳の3つに分けて現況を整理し報告しておく。

2. 「県遺跡地図」に登録されている古墳の現状

(1) 大平山1号墳、大平山2号墳
大平山1号墳は標高273mの大平山山頂直下の南斜面に、また大平山2号墳は1号墳より数百メートル南西に下がった尾根上に立地する。どちらも直径20mほどの円墳と思われ、南に開口する横穴式石室を埋葬施設とする。石室上の墳丘盛土は流出し、天井石が露頭していたり石室内に落ち込んだりした状況ではあるが、全体的にはよく残っている。昭和50年代、横穴式石室の現況測量調査が実施され、測量図は犬山市史(文献4)に掲載されている。ただ、現地には説明看板等がないため、ハイクーが多い散策路上にあるにもかかわらず、残念ながらそれと気が付く人は少ない。それどころか石室の



空間内にはごみが投棄されているのが現状であり、説明版の設置が早急に望まれる。なお、「県遺跡地図」の大平山1号墳のマーク位置は南へズレており、実際はより山頂に近い(図2参照)。

(2) 善師野1号墳、善師野2号墳、小野洞1号墳
善師野2号墳は「学報9」と「古墳報告書」では大平山3号墳、善師野1号墳は「学報9」では大平山4号墳とされる。2号墳は伏屋集落の西側に、善師野1号墳は大平山南東麓の谷地形の地点にマークされているが、残念ながら現地踏査ではどちらの地点でも古墳は確認できなかった。両古墳とも埋葬施設に家形石棺が内蔵されるといわれているが、周辺の聞き取り調査でも存否は確認できなかった。破壊の情報もないため現状では不明とせざるを得ない。今後とも継続して確認調査を進めたい。

小野洞1号墳は1988年犬山市教育委員会の発掘調査後消滅しているとのことであるが、未報告であり詳細は確認できない。「県遺跡地



◀図1「愛知県遺跡地図(Ⅰ)尾張地区」

- 4 大平山 1 号墳
- 5 大平山 2 号墳
- 6 善師野 1 号墳
- 7 善師野 2 号墳
- 22 小野洞 1 号墳
- 23 永洞古墳
- 24 右近塚古墳
- 25 左近塚古墳

図1での位置は現在のひばりヶ丘公園内であり、保存ができそうな位置だったにもかかわらず破壊されてしまったことは残念である。現状でも古墳の痕跡は確認できなかった。

(3) 永洞古墳

昭和9年、畑開墾中に家形石棺が偶然発見されたことで、存在が明らかとなった古墳である。石棺の周辺には石室にふさわしい石材が確認されなかったため、小型の石材による礫槨もしくは石棺の直葬と思われる。石棺発見時には当時愛知県史跡名勝保存主事であった小栗鉄次郎が駆けつけ調査を行っている(文献7)が、その後の石棺の処置については「厚く古墳主の霊を祀りたい」との地元住民に賛意を表し、現地への直の埋め戻しを認

めている。その時に「出来るならば発掘の由来を記した碑を建て永く後世に伝える様希望した」ことが報文に記されているが、まさに小栗の言を守って今も竹林中に説明看板が立つ。墳丘盛土がないため古墳を目視することはできないが、説明看板が立つため石棺出土地点は現在も確認できるのである。忘れ去られそうになった時期もあったそうであるが、地元の努力が文化遺産を後世に伝えている好例といえよう。

なお、「県遺跡地図」の永洞古墳のマーク位置は、実際よりも東へズレている(図2参照)。

(4) 右近塚、左近塚

まず古墳の位置を整理するが、「県遺跡地図」24番右近塚の地点は、「学報9」・「古墳報告書」・「犬山市史」ともに左近塚とされる位置に近い。一方「県遺跡地図」25番の地点は他の文献でのマークはなく、現状でも古墳は確認できない。また、「学報9」・「古墳報告書」で光塚とされるのが図2の24番地点である。明治時代刊行の『尾張名所図会』(文献8)にも同様な位置関係で「左近塚」と

「光り塚」を確認することができる。どうやら「県遺跡地図」24番の右近塚は光塚のことであり、南北の2古墳は北に光塚(右近塚)南に左近塚と考えるのが妥当であろう(註3)。従って、「県遺跡地図」の右近塚、左近塚2地点は、位置が下方にずれドットされているものと理解しておきたい(図2参照)。

ただ、1980年代までは光塚と呼んでいた古墳がなぜ右近塚となったのかは今回の調査では明らかにできなかった。右近塚と呼ばれた古墳が別にあつた可能性もあり、事実「学報9」では、「妙感寺古墳が右近塚と言われていた」ことを記している。いずれにしても「県遺跡地図」に掲載されていることで公式な遺跡名となった「右近塚」の方が、昔からの呼称「光塚」に変わって用いられているのが現状(註4)であり、是非を問うためにも今後聞き取り調査は継続していきたい。さて、両古墳は「県遺跡地図」では残存となつてはいるものの、どちらも住宅地内に埋もれており、古墳の痕跡を地上に確認することはできない。

以上、「県遺跡地図」に登録され

ている古墳のうち、現存が確認できるのは大平山1号墳、2号墳。目視では確認できないが地点が明らかなのが永洞古墳。存否不明が善師野1号墳、2号墳。地表上は消失が小野洞1号墳、右近塚、左近塚となった。

3. 「県遺跡地図」未掲載ながら、過去に可能性が指摘されている古墳の現状

(1) 小野洞古墳群

「古墳報告書」分布図では、現在のひばりヶ丘公園内にあたる場所に、古墳のドットが全部で3箇所記されている。うち1基が発掘調査後消滅した小野洞1号墳であり、位置的には13番か22番と思われるが確認はない。現状ではどちらの地点でも古墳を確認することはできなかった。最も南東の12番地点は、公園と隣地の瑞泉寺別院との境界付近に位置する。ひじょうに眺望の良い古墳立地の適地であったが、こちらも古墳の痕跡は確認できなかった。

(2) 富岡2号墳、富岡3号墳、永洞2号墳

これら3古墳は、ひばりヶ丘公園から南西に細長く伸びる舌状尾根上

に立地する。

富岡2号墳は「古墳報告書」に位置がドットされているものの、「学報9」には記載がない。その地点は細尾根の最西端であり、古墳適地ではあるものの、現状ではその痕跡は確認できなかった。

富岡3号墳は「古墳報告書」での呼称で、「学報9」では永洞3号墳とされる。その「学報9」には石室石材の一部が露頭していることと、石棺と思われる通称「イカ石」の露出を伝える。永洞古墳石棺の調査を行った小栗鉄次郎の報文にも「(永洞古墳より) 東方ほど近き山頂にも石槨の現れたる墳丘の存在が見られ」とあり、石材の露頭していた富岡3号墳(永洞古3号墳)を指していた可能性があろう。ただ、現状ではわずかな墳丘状の高まりが観察できるものの、石室や石棺石材の露出はないため、古墳の確認を得るには至らなかった。

永洞2号墳は「学報9」での呼称。「古墳報告書」ではドットのみで古墳名は記載されていない。「学報9」では直径12〜13m高さ3〜4mの墳丘が残ることを伝えるが、現状では

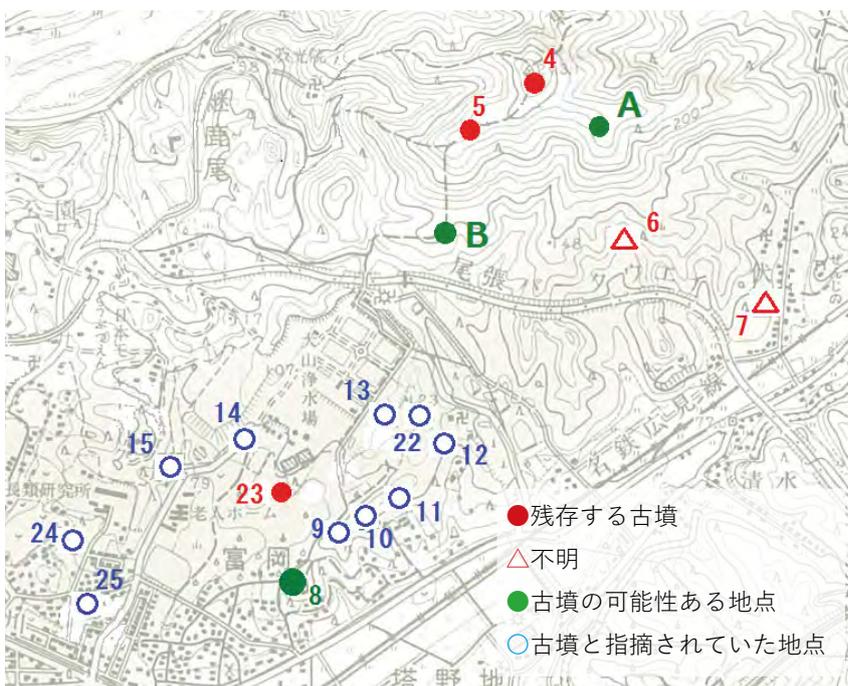
確認できなかった。

(3) 白ヶ峰古墳

永洞古墳石棺の調査を行った小栗鉄次郎の報文に「白ヶ峰と称する丘陵上にも直径約35mの円形墳が現存し」

(文献7)とあり、早くから大型円墳の存在が示されていた。白ヶ峰は、富岡2・3号墳などが立地する細長い舌状尾根から、西に切り離された独立丘。周辺を広く見渡すことができ、古墳の立地として

◀ 図2 大平山南斜面の古墳

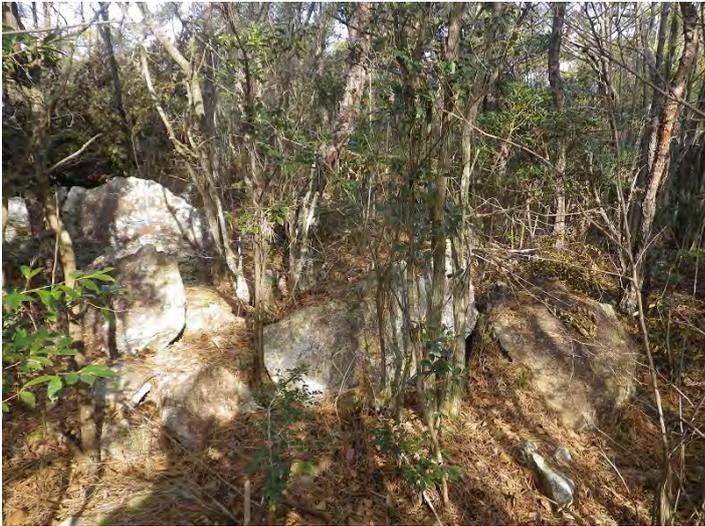


- 4 大平山1号墳
- 5 大平山2号墳
- 6 善師野1号墳 (大平山4号墳)
- 7 善師野2号墳 (大平山3号墳)
- 8 白ヶ峰古墳
- 9 富岡2号墳
- 10 富岡3号墳 (永洞3号墳)
- 11 永洞2号墳
- 12・13・22 小野洞古墳群
- 14 不明
- 15 官林1号墳?
- 23 永洞古墳
- 24 光塚 (右近塚古墳)
- 25 左近塚古墳

は申し分がない。ところが、「古墳報告書」にはドットされているもの、「学報9」や「犬山市史」では記載されていない。

現況は平らなテラス面の上に構築された30m以上の盛土にも観察できるが、平面的にも不整形な円形と思われ、高さも規模の割には2.5mほどと低い。また、葺石や埴輪は

◀ 大平山東尾根上の古墳参考地



確認できず、埋葬施設や副葬品にかかわる情報も全く知られないことから、やはり積極的に古墳とするには躊躇せざるを得ない。保存状態は良いので、測量調査、試掘調査などを経て古墳の是非を判断すべきであろう。

(4) 官林1号墳

「古墳報告書」では「官林1号墳から昭和21年の開墾の際に石棺が出ている」の一文があるものの、官林1号墳なる古墳の位置は明記されていない。所収の分布図で字名官林に位置するのは図2・15番地点だけであることから、一応この地点を官林1号墳と捉えておく。ただし、現況では古墳を確認することはできなかった。

以上、「県遺跡地図」には未掲載ながら過去に可能性が指摘されている古墳では、白ヶ峰古墳に可能性が残るものの、他の古墳は残念ながら存否すら確認できなかった。

4. 新規に可能性を指摘する古墳

(1) 大平山東尾根上地点(図2・A)



▶ 石棺? 「イカ石」現況

大平山山頂直下からは、大平山2号墳の側とは反対の南東に張り出す尾根がり、その先端はさらに北東と南に枝分かれする。今回、古墳の可能性を指摘する地点は、その南に延びる枝尾根上に位置する。立地的には大平山2号墳と同じである。ちょうど、大平山1号墳を頂点とすれば大平山2号墳と対称的な位置関係となる。

現況は石室に適した大型の石塊が長さ5m、幅2mほどに散在しており、古墳とすれば墳丘は大きく流出していることとなる。石塊の地点から南へ5mの地点に、80cm×35cmほどの灰色の凝灰岩質砂岩がある。通称イカ石や竈石と呼ばれる地元善師野で産出する特徴ある石材であり、古墳時代の美濃・尾張地区では、この石材で数多くの家形石棺が作られている。なかば埋もれているため、全体の形状は把握できないが、麓の善師野周辺から人の手によって持ち運ばない限り、当地点では存在しない石材であり、古墳時代後期の家形石棺である可能性が高いと考える。散在する石塊は石室として確実に組み合わせられた確証は得られなかったが、家形石棺を内蔵する横穴式石室を内部構造とする後期古墳と想定しておきたい。なお、周辺に遺物は認められなかった。

(2) 大平山南麓地点(図2・B)

大平山2号墳から南へ急傾斜面を降りきると標高約150mの東西方向の低尾根となるが、その尾根南端に今回古墳の可能性を指摘するも

う1か所の地点が位置する。

現況は北側を堀状にカットして丘陵から切断しているようにも観察でき、低いながらも墳丘が残るように見える。また、南側では人頭大の石がわずかながらに認められ、葺石もしくは墳丘裾部を巡る列石の可能性も考えられる。古墳とすれば直径15mほどの円形墳となろう。マウンド東側に石室石材に可能な1m角ほどの石材があるが、大型の石はその1点のみである。マウンド中央部から南にかけてはくぼみが認められ、南に開口した石室の石材が抜き取られたかの様相を呈している。周辺に遺物も認められないが、横穴式石室を埋葬施設とする古墳の可能性をここでは指摘しておきたい。

5. おわりに

今回の踏査では「県遺跡地図」では残存となっていた古墳でも、現状では不明や地上からは確認できなくなっていることが多く、残念であった。また、過去、古墳と指摘されていた地点でも現状で確認できる古墳は少なかった。ただし、地上の盛土部分が削られても、周濠などの痕跡

は地中に残る場合も多い。当該地点での掘削等の工事に当たっては、是非確認の発掘調査が行われることを望みたい。

一方、残存の古墳では、状況よく残っており、人通りが多いにもかかわらず、ほとんど古墳とは気づかれることのない大平山1・2号墳と、古墳の特徴は地上からは確認できないが、現地に看板が立つため石棺が地中に眠っていることを認知できる永洞古墳の二つが「未来に伝える」ことにおいて対照的であった。あらためて、地元の人びとの「気持ち」が文化遺産を支えていることと、これらをサポートすることが我々のNPO活動の一つであることを痛感した。大平山1・2号墳には是非看板の設置を望みたいが、むしろNPO活動として看板を設置することを視野に入れたい。

また、今回の踏査では、2箇所にて新たな古墳の可能性を指摘した。これに白ヶ峰を加えた3箇所の「古墳の可能性ある地点」については、今後、複数の考古学専門家による現地検討会を実施する予定である。もちろんその結果も報告していき

い。

現地踏査↓遺跡の可能性の抽出↓専門的な検討↓文化財の認定↓公開↓活用↓そして未来へ伝える。NPOとしての活動やサポート範囲は多岐にわたる。

註

- 1 服部哲也・近藤健一「入鹿池周辺の古墳踏査成果について」『研究紀要「瀬波」創刊号』2014年
- 2 現在は、愛知県が公開するホームページ『マップ愛知』の「愛知県文化財マップ(埋蔵文化財・記念物)」でも閲覧が可能であるが、大縮尺で細かな地点が確認できないことや、動作が遅いなどの不都合が多い。改善を望みたい。
- 3 また、煩雑になるので本文では触れなかったが、『上野古墳群』(文献5)では、光塚を南別祖1号墳、左近塚を南別祖2号墳と呼んでいる。この名称は字名からの命名と思われる。
- 4 近年発刊された報告書『東之宮古墳』(文献6)所収の「図1-6周辺の遺跡」でも、概要報告で使用していた「光塚」から「右近塚」に名称を変更している。

文献

- 1 愛知県教育委員会『愛知県遺跡地図(Ⅰ)尾張地区1994年』2014年
- 2 愛知県立犬山高校地歴クラブ『地歴学報第9号』1972年
- 3 犬山市教育委員会『十三塚古墳 熊野神社第1号墳』1972年
- 4 犬山市『犬山市史』資料編3 考古代・中世 1983年
- 5 犬山市教育委員会『上野古墳群』1968年
- 6 犬山市教育委員会『東之宮古墳』2014年
- 7 小栗鉄次郎「城東村大字富岡永洞古墳」『愛知県史蹟名勝天然記念物調査報告書第12』1934年
- 8 岡田文園・野口梅居『尾張名所図会後編』1880年

謝意

現地踏査にはニワ里ねっと会員の近藤健一氏の協力を得たことを記して御礼申し上げます。

NPO 法人
にわ
古代瀬波の里・
文化遺産ネットワーク
(ニワ里ねっと)

木之下城伝承館・堀部邸
(NPO 事務所)

〒484-0084
犬山市大字犬山字南古券 272
TEL:0568-90-3744
FAX:0568-90-3743

青塚古墳史跡公園

〒484-0945
犬山市字青塚 22-3
TEL:0568-68-2272

HP 《ニワ里ねっと》
<http://niwasato.net>
《木之下城伝承館・堀部邸》
<http://horibetei.com>

f <http://www.facebook.com/niwasatonet>
t <http://twitter.com/#!/niwasatonet>

研究紀要 第3号

niwa
瀬波



《編集・発行》

NPO 法人古代瀬波の里・文化
遺産ネットワーク (ニワ里ねっと)

《写真》

中野 耕司、ニワ里ねっと事務局

《発行日》

平成28年5月21日

※本書の内容、テキスト、画像の無断転載、
無断転用を禁止します。

ニワ里ねっと会員募集

ニワ里ねっとでは、会員・賛助会員を募集しています。
私たちと一緒に文化遺産を活かしたまちづくりに参加
しませんか？

会費

正会員 一口 3,000円
賛助会員 一口 3,000円 (個人・団体とも)

会員特典

1. 会員証の発行。会員証の「参加印」を集めると、記念品を贈呈。
2. 会報「さとの四季だより」を年6回お届け。
3. 各種イベントに会員料金で参加。

申込方法

- 方法1. 青塚古墳ガイド施設の窓口にて受付。
方法2. 下記郵便振替口座へお振込み。
通信欄に、「年会費」とご記入ください。新会員様は、「新規正会員」ま
たは、「新規賛助会員」と明記の上、住所・氏名等を必ずご記入願
います。(※申し訳ありませんが、手数料はご負担願います。)

郵便振替口座

口座番号 00850-9-198552
口座名称 (漢字) 特定非営利活動法人 古代瀬波の里・文化遺産ネットワーク
口座名称 (カナ) トクヒ コダイニワノサト プンカイサンネットワーク

上記の郵便振替口座にて「寄付金」も受付けております。
ニワ里ねっとの活動の応援、よろしく願いたします。



あなたも
ニワ里ねっとに
参加しませんか？

個性豊かな
メンバー活躍中！

